

かたつむり



句集

かたつむり

布村松景

春の句

梅が香を歩幅小さく愛でにけり

芋坂に梅一輪の日差しかな

うすらい

薄氷やお蔦の梅の一分咲き

呉服屋の鏡に映る春の雪

春の雪父のマントに潜りし日

鼓打つ指のしなりや大石忌

いぬふぐり木曾路は細き雨のなか

春寒し手斧削りの床柱

風の意にそひて咲つぐ梅白し

寢返りて京の一夜や鐘朧

屋根職人見下ろす梅の八分咲き

春寒や言葉足らずの詫び言葉

光琳の筆先走る軒の梅

風の間や無心に佇てば梅匂ふ

女人禁制踏分石の母子草

春の夜や母の形見の箱鏡台

思惟佛のお膝濡らして花の雨

白梅の古木に遠き古城かな

水鳥の雫に春の光かな

落花浴び南州像の太き眉

陶房の雨だれ春を奏でけり

梅一枝剪らずに戻る机かな

春の野に風の匂ひを掠めけり

初蝶の越えて戻らぬ屋根の反り

飛鳥路の菜の花遠く塔二つ

草の芽や遺跡調査の泥の靴

菜の花や一年生の帰る頃

春の波海女の草履をさらひけり

余生悠々胡座くずして花朧

あぐら

信濃路に貨車を吸ひこむ春の山

意地張りし明治生まれや春の雷

浮雲の流るる里や蝶生まる

散る花にまなごし落とす磨崖佛

手鏡に映す窓辺の遅桜

散る花に越されて昼の散歩道

花冷や水指運ぶ足袋の反り

平らかな
仙足石や
桃の花

金縷梅のしべの赤さや残る雪

廃校の破れガラスや桃の花

崖下に狸の噂春の月

れんぎよう

連翹や御堂に満つる笑ひ声

大和絵の中を迷ひて春惜しむ

桃咲いて教師見送る小島かな

瀬戸内海豊島にて

河馬の目を大きく浮かべ水の春

烏賊刺の透けて唐子の伊万里皿

窓ガラスまあるく拭いて初音かな

志功描く天女の胸や春深し

剥落の仁王の臍や春の雷

へそ

藪椿
一輪落ちて風を呼ぶ

陽炎や飛驒高山の水の音

春雷や松のかぶさる志士の墓

千枚田斜めに抜ける春疾風

春雨に受難八士の墓碑黙す

豪徳寺

父祖の地やふところ深き藪椿

江ノ電の残せし風や散椿

呟いてその嘘ほんと春の風

地虫でて恥じらひ多き浮世かな

春水の音のこもりし蛇籠かな

天平の鷓尾しびを遠目に春惜しむ

閻魔大王口中真赤春疾風

無人駅降りて出会ひし葱坊主

面打ちの鑿先光る五月かな

のどけしや駅舎の裏の物干し場

夕燕釣人竿を納めけり

黑板に数式残る遅日かな

むべ
郁子の花村にひとつの雑貨店

麓より暮れて灯ともす甲斐の春

春雷に土偶の眠りさめやらす

三輪山に雨の気配や木の芽和

きのめあえ

振り向かず別れし人や春の星

鶯に頼杖とけり山の宿

たまうき

玉浮子を波にあづけて日永かな

轉や動かぬままの芥子浮子

からしうき

雲の下を雲流れゆく帰雁かな

春霖や古地図に探す先祖の地

亡き母の燭ともなさむ紫木蓮

鐘楼をくぐりて蝶の風にのり

飛石を先へ先へと母子草

憂きことはさらりと捨てて桜餅

牛の背を越へて連蝶日は西に

午後三時西病棟の春時雨

雨蛙乗せて八手は風の道

囀を梢に残す日暮れかな

大
利
根
の
橋
一
直
線
に
春
を
切
る

以下夏の句へ